産業観光
きりゅう紀行㊽

五十三年ぶりのお目見え 桐生の隆盛伝える巨大屋台

本町五丁目祇園屋台

第51回を迎える桐生八木節まつり、八木節とともにまつりの大きな柱である桐生祇園祭で、本町五丁目の祇園屋台が53年ぶりに復活する。すでに五丁目のジョイタウン広場に組み上げられており、８月１日から３日までのまつり期間中に屋台を舞台としてお囃子や神楽、歌謡ショーなど多くのイベントが開催される。

五丁目屋台は幕末の安政６年（1859）の制作、間口 7.5 メートル、奥行き 6.4 メートル、高さ 6.6 メートルの巨大屋台、昇り龍、降り龍を刻んだ龍柱をはじめとする華麗な彫刻は、藪塚の名工で「四丁目鉾」も手掛けた岸亦八（きしまたはち）の作。彫りものは龍、鶴、亀、牡丹、獅子など70以上が屋台を飾り圧巻だ。襖絵は長沢米習による「牡丹之図」と「八ツ橋図」である。安政年間には本町一丁目、三丁目、四丁目の屋台も作られた時期で、当時の桐生の隆盛ぶりが伺われる。

公開されたのは昭36年（1961）が最後、町会が管理する収蔵庫に眠っていたが、「町の貴重な財産を次代に伝えたい」（飯塚晃弘五丁目町会長）と復活に踏み切った。今年の桐生八木節まつりでは訪れる人たちの注目を大きく集めそうだ。

桐生祇園祭は今年で 359 年の歴史を重ねる。江戸時代末期には屋台の曳き違いなどが行われ、屋台では江戸芝居などを夜通し上演、その華やかさから関東の三大夜祭りと言われた。

特に桐生の祇園祭は織物業の繁栄や桐生新町の町衆文化を背景に独自の発展をみせ、屋台や鉾、祇園囃子や神輿、大幟（おおのぼり）にみられるように彫刻、絵画、書など素晴らしい祭礼芸術が創造され、現在に伝わっている。